

文化的景観から見た祇園橋周辺河川整備に関する考察

熊本大学工学部 学生会員 ○高木 雄基

熊本大学大学院 正会員 星野 裕司

熊本大学大学院 正会員 小林 一郎

熊本大学大学院 学生会員 遠山 浩由

1. はじめに

祇園橋は、熊本県天草市（旧本渡市）の町山口川下流部に位置し、平成9年に国指定重要文化財に指定された橋である。現在、祇園橋周辺では河川整備が計画されており、「治水」と「文化財保護」を軸とした整備方針が示されている（図-1）。

ただし、現在の整備計画では「治水」については十分に満たされているといえるが、「文化財保護」について十分だとはいえない。

現計画における「文化財保護」の考え方は、文化財を物としてのみ捉えており、人々のアクティビティなどは考慮されていない。そこで、文化財を単体として捉えるのではなく、広い視野で見ていくことが必要となる。この手掛かりとなる視点として、文化的景観という考え方をを用いる。文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定義されている。この視点を用いることで、「文化財保護」という側面を考える。

本研究では、祇園橋周辺における文化的景観の整理や解釈を行い、「文化財保護」という側面が考慮された整備計画に関する考察を行うことを目的とする。

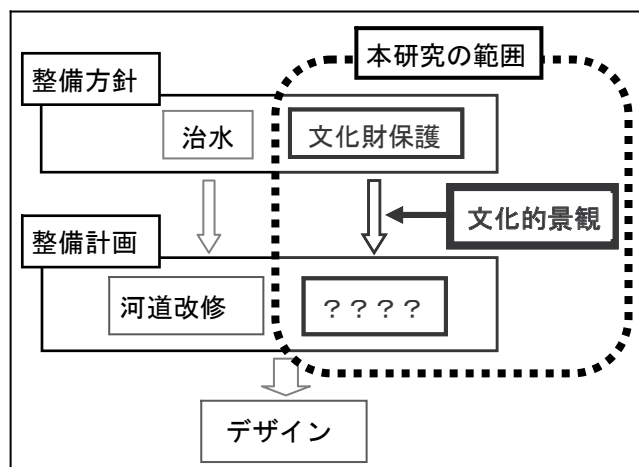


図-1 研究の位置付け

2. 調査対象

(1) 本渡市の概要

熊本県本渡市は、天草諸島の中央部に位置する面積約145km²、総人口約4万人の市である。有明海、不知火海に囲まれた天草地方の行政、経済、交通の中心地である。2006年には2市8町が合併し、総面積約683km²、総人口約9万3千人の天草市が誕生した。祇園橋は本渡市の中心部に位置する。

(2) 祇園橋の概要

町山口川に架かっていた土橋は、河積が小さいため、梅雨や台風時の洪水により度々流失した。そのため、流失しない丈夫な石橋の建設が望まれ、八坂神社（以下、祇園社と呼ぶ）の前にのみ広がっていた岩盤を基礎として、天保4年（1833年）に祇園橋が祇園社の前に建設された（写真-1）。祇園橋は、祇園社への参道としても利用されており、材料は地元で採れる砂岩質の下浦石を使用し、江戸時代以前の石造桁橋としては現存最大である。祇園橋は45本の角柱の橋脚によって支えられており、岩盤を削らず起伏に合わせて橋脚の長さを違えるなど、江戸時代の石工の工夫が見られる。これらのことが評価され、平成9年には国指定重要文化財に指定された。また、祇園橋の架かる町山口川は、天草・島原の乱（1637年）の激戦地として知られている。



写真-1 祇園橋と岩盤

3. 現整備計画と問題点

整備方針では、祇園橋と祇園社の一体となった景観の保存が盛り込まれている。それに基づいて、現整備計画では、祇園橋の流失を防ぐために、祇園橋を囲い

込む形に流路を変更する提案がなされている。

しかし、現計画では、「文化財保護」の側面はうまく吸い上げられていないと考える。なぜならば、祇園橋の風景を成り立たせているものは、祇園橋と祇園社だけではないからである。祇園橋を支える基礎の岩盤や、橋の下を流れる水等が一体となつて一つの風景を作り上げており、どれも切り離すことのできない密接な関係にある。現計画では橋の下を水が流れることはなく、この関係が切り離されてしまう。さらに、流路が変更されたことにより、上流から見えている祇園橋の風景が見えなくなるという問題も浮かび上がってくる。

4. 分析

(1) 交通の要衝としての祇園橋

町山口川には、天草・島原の乱当時から、現在の本渡橋と諏訪橋の間に土橋²⁾が存在した。祇園橋建設以前、昔の街道である往還は本渡の中心に入ると、庄屋の前を通る経路と、諏訪神社とその周りに発達した街を通る経路の2つに分かれていた。町山口川まで至ると往還は再び合流し、下津・深江方面、富岡方面、御領方面に分かれた³⁾ (図-2)。

祇園橋建設以降、土橋はなくなり、明治35年(1902年)頃に県道として本渡橋(土橋)が建設されるまでの間、祇園橋が往還としての役割を担っていた。

その後、明治37(1904年)年頃に諏訪橋(土橋)、昭和11年(1936年)に睦橋(土橋)が建設され、交通の要衝として祇園橋の重要性は薄れていった⁴⁾。

これらのことから、祇園橋の建設以降、明治30年代まで、住民や往還を利用する人々にとって祇園橋は必要不可欠な存在であったといえる。

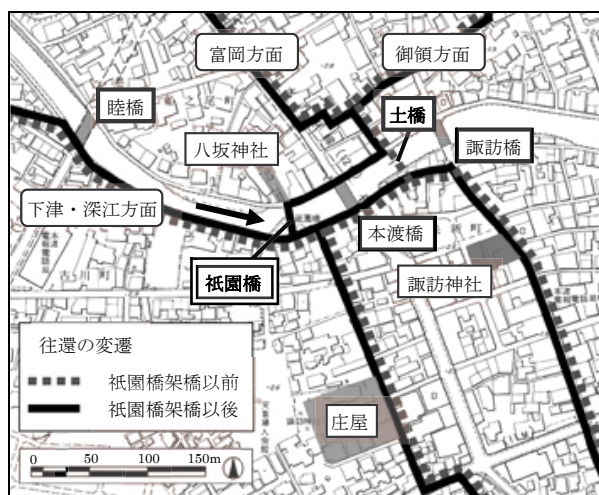


図-2 祇園橋周辺における往還の変遷

(2) 祭の舞台としての祇園橋

現在、祇園橋周辺では、3つの祭が行われている。

a) 八坂神社(祇園社)の祭

この祭りは、無病息災、悪疫退散、五穀豊穡を祈り7月に行われる。祭では、神事後獅子舞が行われ、続いて笛や太鼓の調子に合わせての神幸行列が行われる。行列は祇園社を出発した後、町内を回り、最後に祇園橋を右岸から左岸へと渡り、祇園社へと帰ってくる。

b) 本渡諏訪神社の祭

11月1日に行われる神幸行列は町内を回った後、初めに祇園社に参る。この時、祇園橋の上で少年少女が御諏訪太鼓を奏し、左岸から右岸へと渡る。祭と同時に「本渡の市」が行われる。

c) 天草殉教祭

天草・島原の乱の犠牲者の霊を弔うために10月に行われる。祭ではキャンドル行列が行われ、祇園橋で祈りを捧げる。このとき祇園橋を左岸から右岸へと渡るのは聖職者と少女たちだけである。

このように、祇園社と本渡諏訪神社の祭では、祇園橋をいつ、どの方向で渡るかということに意味があり、祭における祇園橋の果たす役割は大きい。天草殉教祭では、祇園橋の上で川に向かい祈りを捧げることに意味を持つ。すなわち、祇園橋は、各祭りによって異なる意味を持ち、重要な役割を果たす橋なのである。

(3) 整備における考察

往還の変遷から見ると、人の動線や、往還沿いの街や、神社等の関係性を考慮することが重要である。

一方、各祭りにおける祇園橋を中心としたシーケシヤルな眺めや視点場を考慮することが重要である。

詳細は発表時に提示する。

5. おわりに

本稿では往還の変遷や、祭との関係から、整備における考察を行った。今後の研究では、祇園橋に関する組織、年代による海岸線の変遷と、それに伴う土地利用の変遷や、日常の風景の中での祇園橋などの考察を行う。

【参考文献・補注】

- 文化庁ホームページ: <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shurui/keikan.html>
- 本渡市史編さん委員会: 本渡市史、p412、1991.12
- 往還の変遷を知るため: 祇園橋を守る会副会長である鶴田八洲成氏にインタビューを行った。
- 本渡祇園橋と町山口川周辺の環境を守る会: 国重文の祇園橋、p187、1998.1